

養護教諭のイメージに対する志向性や適性感の変化

－養護実習の意義と学生支援のあり方を考える－

Change of student's aptitudes and resolution toward image of Yogo teacher

－The meaning of Yogo practice and guiding students－

満田 タツ江 今村 朋代
Tatsue MITSUDA Tomoyo IMAMURA

I はじめに

限られた修業年限で養護教諭としての幅広い知識と技術を修得させ、さらに資質の向上をめざすには、相当の教育内容の充実とそれなりの支援が必要ではないだろうか。

生活科学専攻では、それぞれ異なった動機で入学してくる学生に、まず、養護教諭についての正しい認識と関心を持たせるために、入学時から養護教諭をはじめ各分野で活躍している卒業生の講話や学外における1日研修等を行っている。1年次は養護実習に向けての事前準備として、2年次は進路支援として、直接の先輩の話は、学生の心に届くものがあると感じている。

これらの学生支援の見直しを含め、養護教諭としての力量をつけるためのさらなる効果的な教育的支援の模索を目的として、現在の学生が養護教諭に対して、どんなイメージを持って入学し、入学後志向性や適性感を変化させた要因などについて調査した。

人との出会いや学習から得られるイメージは、進路選択の物差しと考えられ、それによって志向性が変化すると考えられる。したがって、今回は、入学動機別にイメージの変化と志向性の変化を検討しさらに養護実習前後における適性感の変化についても調査した。その結果から、養護実習の意義と向上のための学生支援の方向がみえてきたので報告する。

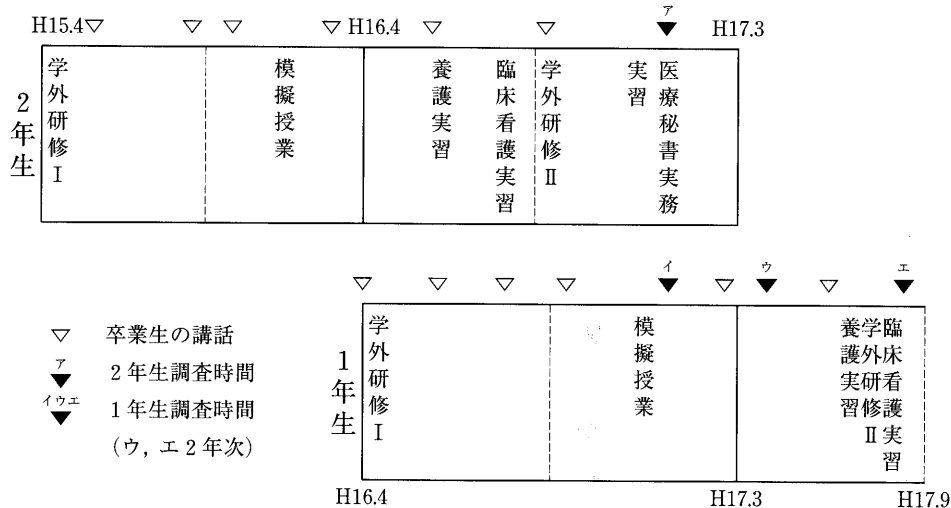
II 研究方法

1. 調査対象： 生活科学科 生活科学専攻の在學生で教職課程の履修者81人（1年生51人 2年生30人）に実施
2. 調査方法： 1年生は継続調査のため不利益を被らないことを説明の上記名とし、2年生は無記名で選択肢法と一部自由記述を用いた質問紙法。選択は複数回答でも可としたが、中でも一番その傾向が強いものに◎印を記入。自由記述は各項目の最後に設けたその他の欄と最後に、自分の気持ちの変化の理由等を書く欄を設けた。さらに養護実習後の一部の学生には聞き取り調査も行った。

3. 調査時期：平成16年12月(ア・イ)，平成17年4月(ウ)，同年9月(エ)，授業時間内に実施。入学前のイメージについても，小学校，中学校，高等学校を通して得られたイメージを平成16年12月の調査日に記入させた。調査内容に関する学習過程及び，平成16年度及び17年9月までの教育的支援と調査関係は図1の通りである。

卒業生の講話については，卒業生の都合で，年によって時期と回数が異なってくる。

図1 調査時期



4. 調査内容：養護教諭に対するイメージの変化と志向性の変化について，入学前，入学8ヶ月後の12月（1年生），入学1年8ヶ月後の12月（2年生）において調査し，1年生は継続調査として入学1年目の4月（養護実習前）1年5ヶ月後の9月（養護実習後）に適性感を加えて調査した。イメージの選択項目は，事前に10人（1年生5人，2年生5人）の学生にインタビューし，共通して出てきた表現のキーワードを種類別に整理して選択項目とした。ここでは特に客観的にみた仕事感を中心にとりあげ，学生の表現をそのまま引用した。

入学動機については，主に養護教諭の資格取得希望（以下A群と称す），主に医療秘書実務士の資格取得希望（以下B群と称す）短期大学卒業目的（以下C群と称す）他大学，短期大学，専攻に落ちた（以下D群と称す）の4群に分け，入学前の志向性については，入学動機のA群を志向性ありと判断した。入学後の志向性については，「養護教諭になりたいと思う」「になりたいと思うが他の職種も経験したい」「思わない」「わからない」の4つで「養護教諭になりたいと思う」「になりたいと思うが他の職種も経験したい」を志向性ありとした。「思わない」「わからない」と答えた学生も教職課程を履修するため，基本的には志向性が低いと考えるが，ここでは「思わない」に志向性無しの表現を用いた。また，「になりたいと思わない」を選んだ理由については，記述による回答を求めた。適性感については，養護実習前後の変化を調査した。「かなり適している」「どちらかというに適している」を適性感有りとし，「適していない」を適性感なしとして，「わからない」「その他」の5項目で調査した。

5. 集計方法：単純集計

Ⅲ 結果及び考察

1. 入学動機について

表 1. 学年別入学動機 人数 (%)

項目	学 年	人数 (%)	
		1 年生	2 年生
A 主に養護教諭の資格取得		20 (39.2)	18 (60.0)
B 主に医療秘書実務士の資格取得		19 (37.2)	4 (13.3)
C 短期大学の卒業資格		1 (2.0)	0
D 他大学専攻に落ちた		11 (21.6)	8 (26.7)
合 計		51 (100)	30 (100)

表 1 より、生活科学専攻では、入学生の70%以上が資格取得目的で入学している。入学動機は、1年生はA群とB群は、やや同数であるが、2年生は60%の者がA群である。さらに1年生は、複数回答では、養護教諭資格取得希望がB群で10人、D群で1人いた。この場合、興味関心はあると思われるが、志向性については不明確である。2年生のB群は複数回答0であった。従って、1年生のB群9人と2年生の4人は、志向性なしと判断される。

最近では、医療秘書実務士の資格だけで良いという学生が少しずつ増えてきているが、単に養護教諭の採用の厳しさ故なのか、それとも別の理由があるのか注目しているところである。

2. 養護教諭のイメージの変化

表 2. 入学前の養護教諭のイメージ 人数 (%)

項目	学年 動機別	1 年生					2 年生				
		A	B	C	D	合計	A	B	C	D	合計
楽そう(簡単, ひま, 楽しそう)		12	8	-	6	26(51.0)	12	2	-	5	19(63.3)
大変そう(忙しい, 難しい)		7	9	-	3	19(37.2)	4	2	-	2	8(26.7)
責任・やりがい(命, 相談)		1	2	1	1	5(9.8)	1	-	-	-	1(3.3)
その他		-	-	-	1	1(2.0)	1	-	-	1	2(6.7)
合 計		20	19	1	11	51(100)	18	4	-	8	30(100)

その他 何をしているかわからなかった(D群) ひまそうな時もあるが大変なことも多そう(A群)

入学前の養護教諭のイメージは、「楽そう」というのが両学年とも50%以上を占めている。(表 2) 当然のことながら、児童・生徒は、養護教諭の職務の一面しか見ていない。近藤¹⁾によると、個々の経験の中でできたイメージで、単純な物が多いという。

表 3. 入学後の養護教諭のイメージ 人数 (%)

項目	学年 動機別	1 年生					2 年生				
		A	B	C	D	合計	A	B	C	D	合計
楽そう(簡単, ひま, 楽しそう)		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
大変そう(忙しい, 難しい)		-	4	-	1	5(10.0)	-	2	-	-	2(6.7)
責任・やりがい(命, 相談)		20	13	1	10	44 (88.0)	18	2	-	8	28 (93.3)
その他		-	1	-	-	1(2.0)	-	-	-	-	-
合 計		20	18	1	11	50(100)	18	4	-	8	30(100)

その他 ・職務内容を知ったから

入学後の養護教諭のイメージは、「責任・やりがい」が1年生88%，養護実習を終えた2年生は、93%であった。(表3) また入学後のイメージで「大変そう」と答えたB群の1年生4人は、入学前のイメージも「大変そう」である。但し、入学後は「責任が重い仕事だから難しそう」と答えている。2年生入学後「大変そう」と答えた2人のうち1人は入学前も「大変そう」であり、理由は1年生と同じである。

入学後のイメージは、学習後のイメージである。90%の学生にとって「楽そう」であった養護教諭観が、専門の授業や養護実習(2年)を通して「責任や、やりがい」のある養護教諭像に変わったものと思われる。

3. 志向性について

(1) 入学時の志向性 (入学動機より)

1年生(51人): 志向性あり20人(39.2%) A, 志向性なし9人(17.6%) B

2年生(30人): 志向性あり18人(60.0%) A, 志向性なし4人(13.3%) B

C群, D群については両学年とも「わからない」である。

(2) 入学後の志向性

表4. 将来養護教諭になりたいと思うか ①

人数 (%)

志向性	学年 動機別	1年生					2年生				
		A	B	C	D	合計	A	B	C	D	合計
有	思う	17	9	1	4	31(60.8)	10	-	-	6	16(53.3)
	思うが他職も経験したい	3	4	-	4	11(21.6)	5	1	-	2	8(26.7)
無	思わない	-	5	-	-	5(9.8)	1	2	-	-	3(10.0)
	わからない	-	1	-	3	4(7.8)	2	1	-	-	3(10.0)
合計		20	19	1	11	51(100)	18	4	-	8	30(100)

1年生 「思わない」と答えた理由 ・自分にはできない(3人) ・他にしたいことがある(2人)

2年生 「思わない」と答えた理由 ・自分にはできない(A群1人, B群1人)
・他にしたいことがある(B群1人)

入学後の志向性については「養護教諭になりたいと思う」と答えた学生は1年生は20%以上増加し、養護実習を終えた2年生は減少している。「思うが他の職種も経験してみたい」は、1年生が21%で、2年生は26%である。

実習を経験した2年生にやや気持ちの揺れが感じられるが、志向性は両学年とも80%以上である。(表4) 入学動機別に見ると、A群の1年生は全員志向性有り、2年生は1人志向性なしで、2人がわからないと答えている。B群では、1年生は9人が「思う」と答えているが、2年生は「思う」と答えた者は0である。2年生の場合イメージでは93%の学生が「やりがいのある仕事」として評価できても、養護教諭への志向性では、10%の者に変化がみられた。また、1年生の「思わない」と答えた5人のうち4人は、入学後のイメージに変化のなかった学生である。さらにこの中の2人は、入学時の志向性無しであった。2年生の「思わない」と答えた2人のうち1人は入学前後のイメージに変化がなく、他の1人は入学前「楽そう」で、入学後に「大変そう」

であった。入学時の志向性は2人とも無しである。

以上から、入学時養護教諭志向が低く、養護教諭について「大変難しい仕事」として捉えている学生で、入学後も変化のない学生及び、入学後にマイナスのイメージを持つ学生の志向性は、低いことが考えられる。

さらに梶岡ら²⁾は、「入学時における養護教諭志向に関する研究」で、入学時における志向レベルの違いは、その後の専門科目の履修状況に影響を及ぼすことを推察している。

本調査でも「思わない」と答えた1年生4人と2年生2人は、「授業が難しい」又は「勉強内容が自分の考えと違っていた。」と答えている。他に同様の回答をしたものは、1年生のB群で、入学時の志向性無し、入学後「わからない」と答えた1人だけである。

また、C群、D群のものは、両群とも「思わない」の者はいなかった。C群、D群は入学後、養護教諭を目指す学生が増えている。次はその中の1人である。

初めのうちは、養護教諭に興味はなかった。でも心理学に興味があったので、医療事務も含めて選んだ。だけど勉強していくうちに子どもたちに頼られる養護教諭はすごいと思った。現代の子どもたちの抱える問題は大きすぎる。はじめ私にはとても・・・と思った。しかし、そういう心に傷を負った子どもが身近にもいます。その子を見るととても放っておけません。私にメールをくれたり、泊まりに来たりすごく頼ってしかったです。その子どもと接していると私も頼られる養護教諭になりたいと思います。

1年生 自由記述欄より

4. 志向性の変化に影響を及ぼした要因

表5. 養護教諭になりたい(又はなりたくない)と思った理由 人数 (%)

項目	1年生					2年生				
	A	B	C	D	合計	A	B	C	D	合計
専門の授業	9	14	1	5	29(56.8)	4	2	-	4	10(33.3)
卒業生の講話	8	1	-	5	14(27.5)	-	-	-	-	-
養護実習	-	-	-	-	-	11	1	-	4	16(53.4)
採用試験	-	3	-	-	3(5.9)	3	-	-	-	3(10.0)
その他	2	1	-	-	3(5.9)	-	-	-	-	-
無回答	1	-	-	1	2(3.9)	-	1	-	-	1(3.3)
合計	20	19	1	11	51(100)	18	4	-	8	30(100)

その他 ・もともとなりたいたとは、思わなかった(B群) ・まだよくわからない(A群)
 ・カウンセラーになりたかった(A群)

志向性の変化に影響を及ぼした要因は、1年生は、専門の授業が62%、次いで卒業生の講話が30%で、卒業生の講話は、全て志向性にプラスの影響であった。2年生は、養護実習が55%、専門の授業が34%であった。卒業生の講話は、複数回答で20%である。(表5)

入学動機別にみると、1年生B群の「なりたいたと思わない」の5人(表4)のうち3人は専門の授業で、1人は採用試験、1人はその他である。2年生B群のなりたいたと思わない2人(表4)のうち1人は養護実習、1人は無回答であった。

野谷ら³⁾の研究にみるように養護実習における志向性の変化はプラスにもマイナスにも強い影

響があるということは、本調査でも明らかである。

また、採用試験を理由に志向性が変化した学生については、今後の学生指導の課題としたい。尚、臨床看護実習、学外研修は、今回は、志向性の変化には、つながらなかった。

5. 養護実習前後の志向性と適性感の変化 (17年度養護実習)

表6 将来養護教諭になりたいと思うか ②

人数 (%)

志向性	時期 動機別	養護実習前					養護実習後				
		A	B	C	D	合計	A	B	C	D	合計
有り	思う	9	1	-	3	13(25.5)	14	7	1	6	28(54.9)
有り	思うが他職も経験したい	7	7	-	4	18(35.5)	3	5	-	5	13(25.5)
無し	思わない	0	6	1	0	7(13.7)	1	5	-	-	6(11.8)
	わからない	4	5	-	3	12(23.5)	2	2	-	-	4(7.8)
合計		20	19	1	11	51(100)	20	19	1	11	51(100)

表7 養護教諭はあなたに適していると思うか

人数 (%)

志向性	時期 動機別	養護実習前					養護実習後				
		A	B	C	D	合計	A	B	C	D	合計
	かなり適している	2	-	-	-	2(3.9)	1	-	-	-	1(2.0)
	どちらかというに適している	7	1	-	2	10(19.6)	8	6	1	5	20(39.2)
	適していない	1	4	-	2	7(13.9)	1	2	-	1	4(7.8)
	わからない	20	14	1	7	32(62.7)	10	11	-	5	26(51.0)
合計		20	19	1	11	51(100)	20	19	1	11	51(100)

養護実習前の調査(表6)では、志向性有りの者が前回の調査(表4)より21.4%減少したが、養護実習後は19.4%増加している。減少した理由については実習に対する強い不安感を訴えるものが37.3%、やや不安が54.9%いたことから不安によるものと思われる。養護実習については「楽しかった」「大変だったけど楽しかった」と答えた者が46人(90.2%)で、その全員が児童とのかかわりを楽しかった理由の第一位にあげている。

しかし、中にはA群の3人が指導者が厳しかったため、「苦しかった」と答えている。そのうち2人は養護実習前には志向性、適性ともに「有り」(表6, 7)から実習後は「わからない」に変化している。自分が今まで描いていた養護教諭像と指導者である養護教諭のギャップに悩み、自信が持てなかったのだという(聞き取り調査より)。

さらに実習後に「志向性無し」と答えたA群の1人は実習が楽しく指導養護教諭から高い評価があったにもかかわらず「自分は何もできないという無力を感じた」と落ち込んでいる。

この学生については養護実習を「苦しかった」と答えた3人とともに個別の事後指導として自己との向き直しを行った。その結果、いろいろな養護教諭がいていい。無理に自己の持つ養護教諭像と重ねず、新たな養護教諭像ができていいのではないかと。そして完璧な実習なんてあり得ない。自分の目標に到達できなくても指導者は別の良い面を見つけてくださった。お陰で自分の気づけなかった良い面を知った。等それぞれが自分自身を整理できたようだ。

表 8 養護実習前後の志向性や適性感、気持ちの変化

番号	動機	養護実習前			養護実習後		
		志向	適性	記 述	志向	適性	記 述
1	A	有	かなり有	やや不安だが親しみがあって、相手のことを真剣に考える養護教諭をめざしたい	有	かなり有	大変だったが楽しかった。児童と関わると自分の心が見えてくる。
2	A	有	わからない	実習の全てに不安が強い	わからない	わからない	養護教諭の指導が厳しかった。自分のことで一杯で児童に目がいかなかった。
3	A	有	有	子どもとの触れあいが楽しみ	有	有	思っていたより子どもが好きだった。人前で話すことが苦手だったが克服できた。スキンシップ嫌いだと思っていたが、小学生に抱きつかれたりするのがとてもうれしく心地良かった。
4	B	無	無	自分には出来ないと思う	有	有	実習は楽しかった。子どもたちが自分の考えを変えてくれました。
5	B	無	無	自分にはやれない	無	無	3週間やり遂げられたことがうれしかった。自分も成長する。
6	B	無	わからない	子ども嫌いなのでできるか不安	無	わからない	実習は楽しかったが実際の仕事となると自分には無理。でも子ども嫌いが治った。
7	C	無	わからない	自分には自信がない	有	わからない	このまま小学校にいたいと思うほど楽しかった。そう思えるほど意外な自分の一面を知った。子どもと関わる仕事がしたい。
8	D	有	有	実習前に母校（高校）に行ったら養護教諭の話を知ったら不安が大きくなった	有	有	子どもは苦手だと思っていたら大好きだった。実習では新しい自分を見つけることができる。

B群で、実習前の志向性について「思わない」と答えた6人は表4でも「思わない」と答えた5人を含んでいる。他の1人は「他にしたいことがある」を理由に「思わない」と答えているが実習後は「なりたい」と変化している。実習後に「思わない」と答えたB群の5人のうち2人は1年時から変化のない学生で、後の3人は養護実習後に変化している。3人とも実習は「楽しかった」と答えているため養護教諭の職務と自己の適性を考えたものと思う。3人のうち2人は実習後に「適性無し」と答え、1人は「わからない」である。

C群、D群については実習後は全員養護教諭志向が高くなっている。

養護実習後の志向性の変化に影響を及ぼした要因は養護実習が84.3%で、表5の2年生(16年度養護実習)より高くなっている。また、養護教諭のイメージについては「大変そう」が49.0%「責任・やりがい」をあげた者が43.1%で「大変だが責任ややりがいのある仕事」としてのイメージが学生の中に定着されたと思う。さらに「楽そう」な仕事としての養護教諭より「大変でも責任ややりがい」のある仕事としての養護教諭志向が高くなったのは、青年期一般の進路選択として、やりがいのある仕事がしたい、認められたいという気持ちの表れだと言えよう。

6 記述事例にみる養護実習前後の変化

表8より養護実習前はA群の学生2名とD群の学生にはやや積極性がみられるが他の学生は志向性・適性ともに低く、不安や自信の無さを訴えている。但し、2番の学生は志向性はあるものの適性についてはわからないとし、不安がある。実習後は養護教諭の指導についていけなかったのか、志向性に迷いが生じている。養護実習においては、指導養護教諭との出会いは直接の指導者であるだけに学生の志向性や適性感に大きな影響を及ぼす要因となる場合がある。(この学生については前述のとおり事後指導を行っている。)

高岡⁴⁾らの大学生を対象とした研究によると適性がないとした学生が実習後に適性を見だし志向性が上がったという報告があるが、4番の学生も実習によって志向性、適性ともに上がった事例である。このような学生は表8の7番を含めて他に4人いた。

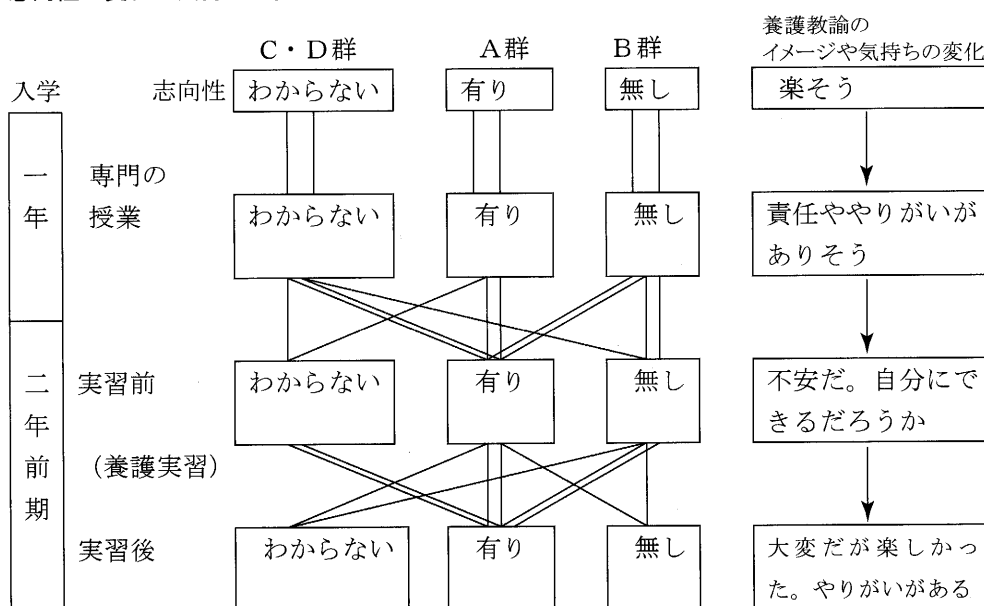
特に7番の学生については「実習訪問」した担当者によると「中心校」のため大変鍛えられる実習だったという報告である。

5、6番の学生は、実習前後とも志向性、適性感ともに変わらないが記述では実習して良かったことがうかがえる。このような学生には自己肯定感を高めるための面接指導が必要と感じた。実習後の記述では、記述者の54.3%の者が自己を見つめる表現をしており、表8はその一部であるが、自分探しの学生の姿が読み取れる。このことから、まさに実習は自己との向き合いであることが感じられた。学生全員が適性を意識して実習に臨んだものと思う。

高岡ら⁴⁾は研究のまとめで、養護実習は、学生自身を捉えなおす機会、適性をはかる場であることを強調していく必要があると訴えている。現場実習が一度だけの短期大学では、尚更のことである。きめ細かな事前事後指導の必要性を強く感じるとともに、特に一度のチャンスをより有効にするためには、事前指導の新たな手だてを検討する必要を感じた。

7. 入学時から養護実習終了までの志向性の変化

図2 志向性の変化と気持ちの変化



短期大学では、短期間で学生は自己と向き合いながら養護教諭志向や自らの適性を確認するために3週間の養護実習に臨み、自己を見つめ直していく作業をしなければならない。わずか1年半であるが、その間にも学生の気持ちはゆれ動き（図2）青年期の心理そのものである。特に養護実習前後の気持ちの変化は著しく、それだけに実習終了後は達成感に満ち、たくましく成長する。「志向性無し」のB群の学生にとっても1つの体験として次のステップへの自信につながるものと思う。養護実習をしたことで「子ども嫌いだと思っていたが好きだった」とか自分の別の面を知ったこともプラスになったようだ。さらに志向性の有無、適性感の有無にかかわらず、これから社会に出る青年期の学生にとって児童、生徒と生で触れあう養護実習は自分を見つめ、知り、高める大変良い機会でもある。そこに養護実習の大きな意義を感じた。

IV まとめ

生活科学専攻の教職課程履修者（81人）を対象として質問紙調査及び聞き取り調査から次のことが明らかとなった。

1. 養護教諭に対する志向性や適性感は学生の持つ養護教諭のイメージの変化と大きく関わっていると考えられる。

養護教諭のイメージは専門の授業から養護実習を通して変化し、同時に志向性や適性感も変化した。しかし、B群の一部の学生には一定の傾向がみられた。入学前のイメージで「大変そう」と答えた学生のうち、入学後も変わらなかった者、及び入学後に「大変そう」と捉えた者の養護教諭志向は低かった。

2. 養護教諭のイメージを大きく変えたものは養護実習である。従って養護実習は学生の養護教諭

志向と適性感に大きな影響を及ぼすと考えられる。

生活科学専攻の場合は、実習前は専門教科の授業の影響が強いが、実習によって大多数はプラスに変化する。しかし中にはマイナスに変化する事例もある。養護実習を境に学生の養護教諭志向や適性感は変化すると考えられる。従って養護実習は学生自身が自らを知る機会であり、適性を図る場でもあると言える。

3. 今後の学生支援として、本調査によって事前、事後の支援を見直す必要を感じた。

まず、実習前については、実習に対する不安感に対して個人面接等の支援や実習前に学校訪問等を企画して児童や、教職員と関る機会を考えたい。

次に、実習後については、表7に示す通り適性について「わからない」と答えた学生が5割いた。従って学生の自分探しを支援する関わりも考えなくてはならないと思う。

しかし、「なりたいたいと思わない」と答えた学生の多くが「将来はこの専攻で勉強したことが生かせる職につきたい」「子どもと関わる仕事がしたい」と答えていることから、学生の養護教諭志向はまだまだ変化しうると考えられる。

今後は近藤¹⁾の「母校訪問」なども参考にしながら生活科学専攻で行っている学外研修の内容や時期の検討、卒業生の講話では、不安や適性面での自己開示も依頼して続けていきたいと思う。

そして、青年期の学生がしっかりとアイデンティティを確率して、社会に羽ばたくことができるように、今後もより効果的な教育的支援の在り方について考えていきたいと思う。

V おわりに

冒頭でイメージの選択項目を整理するためにインタビューした2年生の1人(D群)が入学時を思い出して言った。「入学時の先輩の話しがよかった。大学受験に失敗して落ち込んだまま入学式を迎えたから、先輩の話を聞いてほっとした。早く気持ちの切り替えができた。もしかすると自分は良い所に来たのかもと思えた。母もそう言っていた。もちろん今も満足している。2年間は早すぎた。」と。先輩の講話が、D群の学生には「気持ちの切り換え」と言う思わぬ効果をもたらしていた。

最後に調査に協力してくれた学生の皆さんに深く感謝いたします。

参考文献

- 1) 近藤文子：「論説」発展する養護教諭－全国私立大学・短期大学（部）養護教諭養成課程研究会誌 養成のあゆみ 4. 3-7 2004
- 2) 梶岡多恵子・藤井寿美子・石田妙美・神戸美絵子・福田博美・天野敦子：入学時における養護教諭志向に関する研究－日本養護教諭教育学会 第8回学術集会抄録集 64-65 2000
- 3) 野谷昌子・大川尚子・佐藤秀子・山本映子：養護教諭養成課程の短期大学生の志向性と適性感－全国私立大学・短期大学（部）養護教諭養成課程研究会誌 養成のあゆみ 4. 12-18 2004
- 4) 高岡雅・大谷尚子：学生の養護教諭志向と適性感に関する研究－日本養護教諭教育学会誌 2 67-77 1999

(2005年12月1日 受領)